

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポ幡ヶ谷九〇四 電話(03)3337714649

FAX(03)3229915367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額600円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

戦 争 前 夜

伊勢 太郎……………2

「いつやめたら得か」でなく人間的な連帯を求めた闘いを……………3

―労働運動の現局面と課題―

新聞ジャーナリズム再編の一步か……………4

―産経新聞が夕刊廃止へ―

『社会通信読者会』を全国に作り出合いを楽しもう……………5

東芝二万人リストラは、労使密室の取引だった……………7

「NTT・十一万人合理化」反対集会が大成功……………9

ユニオンの着実な成長を実感……………11

―コミュニティ・ユニオン全国交流会から―

「反首切り・リストラ! 国鉄闘争勝利!」集会にご参加を……………14

川柳一句……………14

読者からのおたより……………13 編集部だより……………10

刊 旬 社 会 通 信

NO. 820

二〇〇二年二月一日号

二〇〇一年二月一日発行

(毎月一日・二日・三回発行)

戦 争 前 夜

平和憲法制定から五十年余がすぎた。この間、自民党を中心とする保守勢力は「ふつうの国」をめざし、日本国憲法の骨格である①前文、②九条の解釈を歪（ゆが）めつづけた。そして、「テロ特措法」で解釈改憲ではもはや矛盾を隠しおせない段階にまで入った。だから、「常識では」「ふつうの感情、感覚では」を連発し、論理的に考える能力をもたぬ小泉ですら、「憲法の前文と九条のすき間、あいまいな点があるところを、どうやって自衛隊ができるところをやるうかと考えている」という。いよいよ憲法改正に道を開くところまでアレヨアレヨと群れて流れてきてしまったのである。

こうした道を開いた元凶は、村山政権時に村山氏が「自衛隊合憲論」を打ち出したことにある。だから、宮沢元首相は「村山首相が自衛隊は違憲でないと言ったことが、今日のような有事法制論議のできる大きな転機となった」というのである。当の村山氏こととんチヤンは十月十七日付の朝日で「政権を担うことになって、現実に存在する自衛隊を無視するわけにはいかなかった。自衛隊を認めた上で憲法にあった形にしていくことが政治の仕事であり、国民の期待だと思った」と語ったうえで「首相を辞めた後の自民党は、私が思ったのとは逆の方向へ、最も心配していたところへ行ってしまった」と、誠にノー天気なことをアツケラカンのカーンとお話しになり恥としない。

それにしても日本はなにゆえに群れて流れる愚行をくり返すのだろうか。一九三〇年の満州事変は中国侵略の契機となった。戦争熱が国民をとらえ軍部を台頭させた。その中心人物が近衛文磨という人物である。彼は撰関家筆頭であり、天皇を利用し軍拡路線をヒタ走る軍部を押さえるには「彼しかない」と、「革新」官僚・人士に祭り上げられたのである。第一次内閣の組閣は一九三七年七月六日であり、翌日の七月七日に日中戦争が開始される。その後、政党は解散され大政翼賛会が結成され、労働組合は産業報国会へと再編された。

村山内閣成立前後は、一九三〇年代のこの時期に類似している。総評は解散し「産業報国会」の流れをもつユニオン連合に道を譲った。そして「平和・護憲の砦」としてあった社会党は「自衛隊合憲論」をとり、社会民主党と名を変えた。その後の動きは一瀉千里をともいふべき状態だ。野党は自民勢力に飲み込まれ、小選挙区制度導入とも相まって、国会における改憲勢力は九割をはるかにこえるところまで行ってしまった。まさに、戦前の大政翼賛的政治状況の出現である。

一九九九年に成立させられた周辺事態法、日の丸君が代法は、一九三八年につくられた国家総動員法、国民精神総動員法の現代版であり、盗聴法さらに今日の自衛隊法改正は、一九二五年の治安維持法の現代版でもある。そして、アメリカの「反テロ報復戦争」の「戦争熱」の中で自衛隊が海外に進出し、テロ特措法で「参戦態勢」つくられた。

(伊勢太郎)

「いつやめたら得か」でなく人間的な連帯を求めた闘いを

—労働運動の現局面と課題—

和歌山で労働者の交流会に出席する機会を得た。参加したのは学校の先生、郵便局、N T Tの仲間、そして住友金属の労働者であった。そこで衝撃的な話しにぶつかったのである。N T T和歌山支店では六〇〇人をこえる仲間が働いているが、そのうち一五八人が今年一二月末という希望退職募集に応じているという。実に職場の四分の一の仲間が退職していくわけである。上積み分含めて退職金がいくらになるのか聞き忘れたが、今年三月末の時は約一年分の給料を上積みし、三〇〇万円をこえる額であったので、それと同様の額と推測される。三〇〇〇万円が多いか少ないか、中小零細企業やパート、派遣で働いている人から見れば、うらやましい限りであろうが、大量失業時代、十人中九人は、後の再就職の見通しはたっていないという。五〇歳を過ぎれば、さらに厳しい雇用情勢である。

今日、公務員職場でも「いつやめたら得か」という話題が飲み屋で中心になっている。将来の夢をなくした労働者が希望退職募集に殺到している現実があるが、私なんぞいつやめたら得かと聞かれれば、やめずに、はっきりいえばどんなにしんどくても働き続ける方が得だと思うし、年金支給年齢が段階的に六五歳に引き上げられ、受給額も減額が予定されている中、退職してどんな生活をたてるのか疑問だし、他人事ながら心配するのである。しかし退職していく人に聞いたら、十八中十人が「ヨメはんも好きにしたらと行ってくれた」と答えるという。これまた不思議というか、驚く現実である。

こうみてくると「いつやめたら得か」「しんどくても働き続ける方が得だ」という、「常識」ではかれない「基準」そのものが溶解しているといわざるを得ない。私はそれこそ労働組合自身の崩壊、その中で労働者の間での団結、連帯感喪失の結果だと、私なりの勝手な結論をもっているが、労働運動を立て直すには、こうなった原因と現状をもっと掘り下げる必要がある。住友金属和歌山でもN T Tと同じ合理化攻撃がある。

住友和歌山では約五七〇〇人の社員がいる。現在そのうち三四〇〇人が一四〇〜一五〇社の関連企業に出向している。その中身はいわゆる「丸ごと出向」から個人経営の企業まで様々である。労働条件は出向先によって異なるが、在籍出向のため住金から補充されている。今出されている合理化案は、三四〇〇人の在籍出向を来年四月から転籍するというものである。住金を解雇し、出向先企業に移すということである。(さらに〇二年一〇月には、持ち株会社を設立し、会社分割を実施する予定になっている。ちなみに持ち株会社は一〇〇人の社員のみ)現在、本人同意を求める動きが始まっている。残念ながらほぼ同意となるようだ。同意したAさん(四八歳)の場合、退職金は上積み分を含めて約二〇〇〇万円という。毎月支給の賃金差額が約八万円あり、五〇歳以下の人については一〇年間一定保障するということで、その分が約九〇〇万円上積みされている。

兵庫では大手企業労働者交流会が続いている。神鋼、川鉄、川重など少数派の交流であり、出向や賃金差別の裁判、地労委闘争をお互い支え合ってきた。実は住金の仲間とも意識的に交流してきたのである。そこで問題になったことは、転出向を拒否した場合どんな扱いを受けるのか、転籍した場合出向先企業は大丈夫だろうか、倒産などになった時雇用はだれが責任を取るのかといった点であった。

実際出向先企業の中には、この機に出向受け入れを返上するところも出ている。弁護士とも相談し、どうするか様々な観点から転籍拒否に向けた議論を展開してきたのである。

転籍拒否を決意した仲間も出ているが、全体的にどんな方向が打ち出せるか不明な点は多い。しかし、ここで言いたいのは少数派に追い込まれ、少数派として居直った労働者の強みと人間的な温もりと連帯である。少数派として立ち上がるのは恐しいし、厳しい現実がある。だが「いつやめたら得か」「闘ったら得か損か」、たしかに生きていくためには当たり前の処世術ではあるが、「去るも地獄、残るも地獄」と三池闘争が総括した労働者としてド根性、虐げられる者の人間性を大切に闘いが求められているように思う。

それと同時に、「去るも残るも地獄」の情勢を明らかにし、現在少数から始めるしかない労働運動再建の道を明らかにするのは私たちの任務である。連合下の闘いも、地域ユニオンの取り組みも実は少数派の運動である。どう連携するのか、どう地域的に支えるのか、産業別結集を図るのか、もう一歩の方針が求められている。

新聞ジャーナリズム再編の一步か

—産経新聞が夕刊廃止へ—

活字メディアの発行部数が減り続けています。出退勤途上の電車で、新聞、雑誌、漫画本を手にする人の姿を目にすることは稀になってしまいました。目にするのは携帯電話をあたかも恋人や大切な人であるかのようにいつくしむ姿です。メール、インターネットでその日、その時かぎりの情報で心を満たす、可愛いけれど、思考能力を長期的には欠如させるのではとの風潮です。

こうした風潮の中で、「いつかは」と予想されてきた新聞の夕刊「廃止」が現実味をおびてきました。日本の新聞界は世界に例をみない発行部数を誇ってきました。全国紙といわれるものは五紙。読売一千万部、朝日八百万部、毎日・日経三百万部、産経二百万部といわれます。この他、地方紙といわれる地域に密着した新聞ですら最大三百万部から五十万部前後に達していますから、日本は「新聞大国」なのです。この新聞社を中核としてテレビ、ラジオ網がつくられていますから、世論形成、誘導にあたっては新聞社を押さえることが最大のポイントと、自民党・政府は全国紙を味方につけるためさまざまな手法を駆使してきました。

日本新聞界の最大の特徴は「戸別配達」です。ですから、これまた世界に例のない朝刊と夕刊が発行され、朝夕刊セット販売が行われてきました。最近の新聞は記事よりも広告記事に名を借りた広告が四十面近くにも達する朝刊の優に三分の二は占めています。読者によりどの面から目を通すかはさまざまですが、実際の機能からすれば朝刊でも夕刊くらの紙面数で十分との思いは強いはずですし、夕刊にいたっては「ほとんど読まない」人も多いはず。「セット販売だから、金魚のフン」のようなものと。

夕刊をどうするかは、新聞社の経営上の課題であったようです。予定される行事の記者会見は朝から午後におこなわれ、朝刊の紙面を飾ります。九月十一日の出来事のような突発ニュースは朝刊には間にあいませんから、夕刊に全面ブチ抜きで掲載されます。しかし、テレビ等のメディアでぶっ通しで放映しつづけますから、ニュース価値はほとんどありません。それにインターネット、携帯電話で部数が減りつづけていることがあります。

こうした事情からでしょう、全国紙の一翼を担うとされる産経新聞が、来年四月一日から東京本社が発行する夕刊約二十五万部を廃止することを決めました。この傾向は全国紙、地方紙ともに拡大します。その時、新聞社でも再編、合併化の嵐がまき起こることになります。

『社会通信読者会』を作り出合いを楽しもう

共に学び合う場

『闘い』という一言が、日常生活の『そこ・かしこ』で飛び交っている今日、私たちはいったい何が「本当の闘い」なのか見極めがつかなくなっている気がします。本来、『争議団』として、現実に関与に参加している人々にあつてさえ、その当事者意識が持てず、世相の混乱に惑わされ翻弄されている現実があります。

一方で「まったくその気はない」人々の中に、表現力の優れた者がいて、言葉巧みに理屈を並べ、いかにも安っぽい『正義感』を売り物にして、己だけが日々の『生業』を立てている実態があります。

私たち、一人ひとりには『事実』を見抜く目も・能力も・それを正す力もあるのに、なぜそれを活かしきれないのでしょうか？ 多分それは、一人ひとりの『本心』よりも、一人ひとりが日々の生活を優先せざるを得ないからだと思います。自分の『本心』に自信が持てない状況に追い込まれている中、言葉だけの腹黒い『偽善者』に振り回されているのが実態でしょう。

圧倒的多数が同様の立場に置かれていることに気付きながら、個々バラバラに分断されていることに尽きると思います。どうしたら、こうした状況を改善できるのでしょうか？ いくら本当の情勢をつかんでも、それを活かしきれなければ、何にもなりません。また、いくら闘争心が強くても、生きた情勢をつかめなければ、やはり何もできません。さらに、正しい情勢と不屈の精神を有していたとしても、一人では何もできません。お互いが有している情報を交換し、意見を交わし、認識を一致する場が今一番求められているのです。固い言葉で言えば、お互いが『共に学び合う』ことに尽きると思います。

何を、何ができるか

問題は、そうした場があるのか？ と言うことです。全体的に見れば「ない」とは言い切れませんが、身近で見れば「ない」のかも知れません。「なくされた」と言った方が正解でしょう。なくした犯人は当然『権力』（当局）であり、深刻なのは、それに荷担した『組合貴族』（飼い慣らされた）と呼ばれる連中が少なくないと言うことです。

現在『存在悪』とさえ思える労働組合の実態、労働者からは『首切り』が現実を訪れても、それに対する怒り・苦しみが見えてきません。自分の将来、子供たちの未来がどれほど「困難」な時代になるのか、みんなわかっているのに黙し、変えようとしません。ようするに「あきらめさせられている」ことにこそ最大の原因があるといえます。

私も実は、そうした一人として悶々とした日々を過ごしてきた経験があります。立ち向かい叩かれ、仲間と信じてハシゴを外され「もうやめた」と、何度『決意』したことか。しかし、悔しくて悲しくて、どうしても納得できない自分の姿がありました。「天は助けべき者を助ける」ではありませんが、同様の考えを持った人はいるもので、節を曲げさせなければ、必ず出会うものです。私もそうした仲間に出会い、随分と助けられました。

ただそこで「なぐさめあっている」のでは、何も解決しません。次に「何をすれば・何が
できるのか」を議論し、実践に打って出ることが必要になります。

その時に、私たちは今一つ自信と確信が持てません。身近で集まり、一定の意思統一と
決意をはかり、いざ実践に。たいていが、ここで行き詰まってしまいます。その現状を打
開するお互いの努力は当然ですが、それだけでは「いかんともしがたい」ものです。そう
いう時に私は、『経験者』（実践を積み上げたあらゆる階層の人達）に知恵と力を借りまし
た。

歴史を振り返ることなく、現状から始まる運動、当事者だけの闘いは、瞬間的な勢いは
あっても、やがて尻すぼみになり、いずれ消滅してしまふ運命にあります。とりわけ労働
運動にあつては『決定的』と言えると思います。こういう時に、変なプライドやは何の役
にも立ちません。

本音が語れ、目標をもつて

私が知恵を借りた一人に、ある労働紙を二五年間に及び発行（旬刊）しているジャーナ
リスト（この呼び方は似合わないかも）がいます。『社会通信』というB5版の二〇ペー
ジほどの労働紙の編集長です。『社会通信』は、その時々々の社会情勢、とりわけ労働者を
取り巻く情勢・実態・闘いを端的に掲載しています。

労働紙のスタイルに良くある「入り口から出口」まで解説した押しつけがましいもので
はなく、読者の立場と想いを活かし尊重しつつ「核心は外さない」という絶妙のバランス
が保たれていると感じました。とくに『読者の声』は必見であり、短い表現の中に読者た
ちの想い・苦悩・連帯感がにじみ出ており、一見『ぶつきらぼう』なアドバイスが、読ん
でいて何とも言えない安心感を覚えます。

私は、さっそく仲間と呼びかけ『読者会』を作りました。当然、私の価値観と仲間の価
値観は違います。ここで押しつけをやれば「良いものも悪い」となってしまう。その
昔「青年はこの新聞を読め！この月刊誌を読め！」と、随分乱暴な『仲間づくり』に巻き
込まれた経験が私にもあります。巻き込んだ人たちは、今はどこにです。

私は、信頼できる仲間に、『読者会』の参加を、それなりに慎重に呼びかけ、後で恥ず
かしい思いをしました。声をかけた大半は、『社会通信』の存在をどうの昔に知っていた
（すでに読者も複数）のです。それもそのはずです。二五年の歴史を有しているのだから
…。

『読者会』は、予想以上の仲間が参加してくれ、二年間に五回の開催をすることができ
ました。ただ『進路』の時代から読者だったという仲間が、第一回『読者会』を開き、編
集人の滝野忠さんが来県するとわかった時に、「滝野さんは六〇歳の後半か七〇歳を過ぎ
ているはずだ。無理をさせてはいけない」と言われ、みんな「なるほど」と頷いていたの
が、今は笑い話になっています。実際に来県した滝野さんは、心配していたその読者より
も若く、インテリの風貌をにじませたながら「田舎のにおいがする若々しい人」でした。

今、全国の労働運動、とりわけ人と人をつなぐ『パイプ』が、完全に『目詰まり』して
います。労働組合は企業内（別）に閉じこもり、政党・セクトは己の利益のみを追求する

ような『大幹部』に牛耳られ、閑散とした人間関係の中で『喜怒哀楽』の『喜楽』はなくなり『怒哀』ばかりが目につきます。

『社会通信読者会』は、お互いが持つている知恵と力、そして元氣とやる気を出し合う場として、目詰まりしたパイプを洗浄するには、たいへん有効な集まりの場となつています。これからも無理をせず、『編集人』の体力と相談しながら氣長に続けていきたいと思います。機会があれば、全国の『読者会』同士の交流の場があつてもおもしろいと考えています。要は、『社会通信』に限らず何でも良いと思います。そこに人が集まる条件があり、本音で語れる環境があり、目標を持って明日からがんばれば、そのためには、まず、集まることからは始まりません。

(大分県社会通信『読者会』・A)

東芝二万人リストラは、労使密室の取引だった

東芝労組は去る八月二日、『自立自営支援制度』の説明・実施にあたっては、希望退職、あるいは指名解雇や肩たたきではないかと誤解されることのないよう、十分な事前確認と丁寧な対応を前提としていただきたい」と会社に要望。この二万人リストラ計画が実は希望退職制度の言い換えであることを、はからずも口にしてしまった。

私たちは、この二万人肩たたきリストラ計画の隠されている部分を詳細に分析しつつ、皆様方に会社と組合にだまされないよう賢明なる判断をされることを訴えるものである。

1、三万七〇〇〇人をリストラして、五五〇〇人を新親採用するという犯罪的手法

まず誤解を解こう。リストラの対象人員はマスコミ発表の約二万人ではなく、約三万七〇〇〇人である。内訳は国内における定年退職と希望退職による人員削減二万一千七〇〇人、グループ外への異動による人員削減七〇〇人、グループ内での異動によりとりあえず雇用を確保される者一万人、海外における人員削減四四二〇人。そして何よりも犯罪的なのは、新たに五五〇〇人の採用計画がすでに練られていて、削減対象労働者二万六八〇〇人に唾を吐きかける経営手法になっていることにある。

2、国内生産拠点の三割削減で浮いた金を、海外生産拠点の拡大に使つてたため

会社はこの計画の中で①国内生産拠点の三〇%統廃合、国内生産・エンジニアリング会社を統廃合し、九八社を二五%削減(〇三年度まで)②アウトソーシングの拡大③競争力強化のための海外生産拠点の拡大を挙げている。これらの施策は、国内産業の空洞化を進展させ、多くの失業者を新たに生み出す愚策に他ならないであろう。

しかも生産拠点の海外での拡大は、生産活動に伴って必然的に産み出される大量の産業廃棄物の海外での捨て場の拡大に他ならない。

3、国内調達先の半減とコストの二割削減で浮いた金を、海外調達の拡大に使つてたため

会社は、調達先六七五〇社の半減等によって、調達コストを二年間で二〇%削減(削減額五六〇〇億円)する、と述べている。

この「調達コスト削減」によって、東芝に納品している下請業者に対しては今まで以上のさらなる「単価切り下げ」が要求され、それは下請労働者の賃下げ、解雇をもたらし、今でも苦しい中小零細の下請・孫請け業者の倒産と多くの失業者をもたらすものでしかないであろう。すなわちこのリストラ計画は、たんに東芝社員を削減するだけにとどまらず、その数倍の弱い立場にある下請・孫請け労働者に多大な犠牲を強いるものである。

4、世間を欺くために作られている経営理念とスローガン

会社は自らの経営理念の中で「人間尊重を基本として」「すべての人々を大切にします」と宣言をし、そのスローガンは「人と、地球の、明日のために」と謳っている。

しかしながら、経営陣自らが招いた経営危機を二万六八〇〇人の労働者の首切りで乗り切ろうというこの計画は、経営理念やスローガンが世間を欺くための小道具でしかないことを証明している。

5、東芝労働組合執行部は、労働者の敵

私たち東芝府中働く者ネットワークは、九月四日の支部定期大会を傍聴に行ったが、その際受付では執行委員の一人は、我々に「このリストラ案はまだ発表されたばかりで検討中なので今大会の議題にはなっていない」と言ったが、大会冒頭の委員長の挨拶ではこのリストラ案を「了解している」と述べた。つまり会社のこのリストラ計画についてはすでに労使間で密室協議が済んでいたというのだ。こんな組合執行部はもはや経営陣のスポークスマンでしかなく、労働者の敵そのものである。

しかも彼らは一人平均約一二〇〇万円を年間給与として我々の組合費から吸い取り、それでも足りないのか、一年に一回は一泊二日の温泉旅行を全額組合費を使って実施し、「調査研究費」という名目で年間約三〇万円を組合費から懐に入れていたのだ。労働者の敵、東芝労働組合執行部を許すまい。

抗議申入書

1、執行委員の一人は「検討中」と言い、何の議論・討議もしない前に委員長が勝手にリストラ案を「了解している」というのはどういうことか。

2、このことは、執行部が率先して会社と一体になってリストラを押し進めていることを示すものである。

3、委員長の「了解している」という発言は、組合民主主義を踏みにじる暴言である。この発言に断固抗議し、撤回を要求する。

4、このような委員長の暴言を見過ごす定期大会は、もはや労働組合の大会ではなく、労働者の総意を形式的に整えるための儀式に過ぎない。

5、私たち働く者ネットワークは、組合執行部の多数に名を借りた言論弾圧、蛮行に対し強く抗議し、謝罪と反省を断固要求する。(以上要約)

(東芝府中に働く者ネットワーク・ニュースより)

「NTT・一万人合理化」反対集会在大成功

「NTT・一万人合理化に反対する集会」を電通労組全国協・全国一般東京労組NTT関連合同分会・全労協の共催で、一〇月二四日夜、シニアワークで開催しました。会場ノイスには座りきれず、通路に座り込む状況で一八〇人を越える仲間が会場を埋め尽くし、大成功を納めることができました。

集会は、電通労組全国協の仲間の司会ではじまり、藤崎議長の主催者挨拶、加藤弁護士から「NTT・一万人合理化の背景と狙い、その脱法性」等について、基調講演を頂きました。その後、NTT職場からの訴えとして、電通労組全国協の高橋事務局長、NTT関連合同分会、NTT労組組合員の各仲間から職場の状況等の報告と闘う決意がありました。続いて、郵政全労協・東京清掃・国労闘争団の各仲間から連帯の挨拶と決意がありました。そして、電通労組全国協の前田議長の「行動提起とまとめ」、全国一般東京労組NTT関連合同分会の仲間による「団結ガンバロウ」で締めました。

電通労組や闘う仲間は、「NTT―一万人合理化」の提案以降この提案の狙いと不当性について、全国各地で訴えて集会を勝ち取ってきていること、提案の白紙撤回に向けて闘ってきていること、そして、提案の具体的選択を前にして一月二日は全国でスト決起をし、NTT持株会社前での座り込み行動を闘うことが提起されました。これらの闘いに支援・連帯することを全体で確認し合いました。

地域子会社の設立―業務委託―退職―再雇用の脱法行為

NTTは、NTT東・西会社のもとに、①地域別子会社を設立（東・営業系一七、保守系一七、西・営業系一六、保守系一六）し、②設備系保守・修理や営業窓口・個人営業などの業務を委託化し、③東西会社から六万人、MEグループから五万人異動させる、④異動は、五一年以上はNTTを退職したうえで再雇用する、⑤給料は一・五割から三割の減額となる等の「NTT・一万人合理化」を提案してきているのである。そして、①NTT東・西に残り企画戦略・グループマネージメント等のキャリア部門に従事する「六〇歳満了型」、②五〇歳末でNTT退職、新会社再雇用・六〇歳退職、六〇歳以降六五歳まで契約社員の「充実型」、③雇用形態は充実型と同じで、激変緩和として五〇歳退職時などの節目に一時金を複数受給する「一時金型」、しかも「満了型」は勤務地限定なしの全国配転が前提等。この三つの形態の内から一つを選択せよというのである。

要するに、「充実型」か「一時金型」のいずれかを選択し、NTTを退職し、子会社再雇用の道を選べというのである。そうでなければ全国どこへでも配転・出向にするぞと脅しをかけてきているのである。

しかし、これは、NTTを複数の会社への分割であり、系列下を図るやり方である。会社分割―営業譲渡等の場合は、「労働契約承継法」にもとづき旧会社との労働協約を承継することとなり、賃金・労働条件は変更することはできないのである。だから、子会社設立―業務委託という形式にし、「労働契約承継法」を免れるという脱法行為のやり方であ

る。また、民法六二五条では「労働者が同意しない限り、会社が一方的に他の会社へ転籍させることはできない」とあるように会社側の都合だけではできないのである。

だから、NTT側は、本人「同意」が前提であるとして「強制的に選ばせる考えはない」「労働者にお願ひする」のだと電通労組等との交渉では云っているのである。しかし、「同意」しなければ全国配転の脅しとNTT労組という多数組合との「合意」形成をもとに迫ろうとしているのである。

さらにまた、子会社は、独自の賃金体系として、①資格賃金・成果加算・成果手当・職責手当・扶養手当・地域加算で構成され、年齢賃金はない。②自動昇格制度はない。③成績・業績にもとづく成果加算の設定などとなっている。これは、能力・業績・資格等・以外には一切賃金は上がらないという賃金制度であるというのである。この能力主義・業績主義制度から行くと子会社への再雇用で六〇歳までの雇用の保障や六〇歳を越えての六五歳までの契約社員の保障は約束されたものではないと云うことである。

「生活と権利・人権」の侵害、「安定した雇用」の破壊を許さない！

この「NTT・一万人合理化」は、国鉄の「分割民営化」を凌ぐ大分割・リストラ合理化である。このような脱法リストラを許せば、脱法企業リストラの先例になり、労働者の「生活と権利・人権」の侵害、「安定した雇用」の破壊を許すことになる。断じて許さないNTTリストラである。

電通労組全国協等は、二月からの「NTT・一万人合理化」の選択を前にして、「提案白紙撤回」、「三つの選択を選ばぬ」、「どれも選ばぬ」を基本に対応し、一月二日には全国でストライキ決起をし、NTT持株会社前での座り込み行動を闘います。

電通労組全国協・闘う仲間の闘いに支援・連帯しよう。

編 集 部 だ よ り

▽小泉君の「一人芝居」が目立つてきました。「おれには国民の人気があり、支持がある。したがっておれに逆らうヤカラは」抵抗勢力」」との思い上がりです

▽小泉君の内閣が誕生してから半年がたちました。小泉君の売りは、「自民党を変える。政治を変える、暮らしを良くする」です。しかし、この半年間に明らかになったことは、

(1)ふえつづける失業者群、(2)すべての経済指標の悪化、(3)自衛隊という軍隊の独断専行。自民党も旧体制と変わりなく、くらしは不安定化の一途です。

▽小泉君を支えているのは「反テロ報復戦争」という戦争熱です。株価は一万円ワレと同じ状況、経済成長率はマイナスへ、不良債権は増える一方で、地域経済と密着した金融機関である信用金庫、信用組合は来年のペイオフ解禁を目前に、倒産の嵐がつづいています。

▽地方経済は荒廃の一途をたどります。地方から大企業の工場は次から次へと撤退し、地方自治体も「地域振興のため」と借金・信組と取り引きしてきたけれど、「もう限界」とペイオフ解禁を口実に、取り引きをうち切ります。地方に都市銀行の看板は見ることはできません。都市銀行と取り引きできる階級はといえば、限られています。

ユニオンの着実な成長を実感

—コミュニティ・ユニオン全国交流会から—

コミュニティ・ユニオン全国交流会は毎年一回開催されてきたが、今回は初めて東海地方での開催となった。今回の集会には三五〇名が参加されていました。九つの分科会、韓国民主労総の代表団の特別報告。パネルディスカッション「みんなでなくそう低賃金」では、中野麻美さん（弁護士）、熊沢誠さん（甲南大学）、小畑精武さん（自治労）、鴨桃代さん（代表委員）からの提起を受けました。

連合加盟方針を提案

一日目の総会での特徴は、活動方針で、「連合加盟の検討」が提案されたことだろう。武庫川ユニオンの中では、これまでナショナルセンター（労働組合の全国組織）について提起も議論もしてこなかったたので、この機会に少し紹介しておきます。もちろん私見です。連合は、一九八九年にそれまでのナショナルセンターであった、総評・同盟などが解散し結成された日本最大のナショナルセンターです。連合結成に至る経過の中では、賛成・反対の大論争がありました。連合の考え方、労働運動の進め方をめぐる議論でした。賛成を表明した労働組合も、今の連合の考え方には賛成できないが、自分たちが加盟して連合を変えていくという主張もありました。

地域でも同様で、中央の連合結成にともない、一九九三年に連合尼崎が結成され、武庫川ユニオンの結成を援助した尼崎総評は、尼崎地区労人権平和センターと名称変更して組織を存続させましたが、多くの労働組合は脱退していきました。

ユニオンの運動は、一九八〇年代前半から東京・大阪などで始まりました。武庫川ユニオンの結成は一九八八年です。当時は、大きな労働組合からは相手にしてもらえないような存在ではなかったと思います。ユニオン全国ネットワークは一九八九年に青森で交流会を開催し、一九九〇年大分で開催された第二回交流会で、結成されたものです。文字通りネットワーク型組織で、単位地域ユニオンがゆるやかに全国的に連携をとってきたというのが現実でした。一九九五年の阪神淡路大震災では、私たち被災地のユニオンを支える意味で大きな役割を発揮し、全国ユニオンの存在意義を確認しました。全国ユニオン抜きに「阪神大震災労働・雇用ホットライン」はなかったし被災労働者ユニオンもなかったでしょう。

その後、労働基準法改悪、派遣法改悪という全国的な課題での全国ユニオンへの要求はますます高まってきました。ところが財政規模は、各ユニオンの分担金での運営ですから、求められている役割に比べれば、あまりにも弱いというか、ニュースの発行と全国集会で終わりという実態でしかありません。

一方、加盟を検討しようとしている連合はといえますと、結成後の一〇年間かけ声とは反対に、組織人員の減少が続いてきました。その最大の原因は、大半の労働組合が企業ごとの労働組合で正社員中心の労働組合だからです。今でも鉄鋼・電機など、凄まじいばかりの人員削減が進められ、正社員から非正社員へという流れのなかで、労働組合組織率、組織人員の低下を招いてきており、連合幹部のみなさんの中にこのままでは、連合の将来はないという危機意識があるのだと思います。

連合は、未組織労働者の組織化に九億円を投入するとしています。そして労働組合の組織化に地域ユニオンの拡大を考えると考えるようになったのではないのでしょうか。今回のユニ

オン全国ネット総会での連合加盟提案の背景だろうと私なりに思っています。したがって、私たちも含め、全国のユニオンの仲間たちの努力で、まだまだ弱いとはいえ相対的には力量を強め、社会的影響力を付けてきたから、こうした議論が出るようになったのです。

一年かけて論議へ

総会では、なにわユニオンから、修正案も提案されました。それは簡単にいうと、「連合加盟に賛同するユニオンで全国組織を結成し連合に加盟する。その全国組織と連合に加入しないユニオンでこれまで同様、全国ネットワークを維持していこう」というものでした。今年一年かけて議論していくことになりました。いすれにしても武庫川ユニオンも質的にも高まっていかないことには、なにも始まりません。たいへん難しい議論になりますが、新たな提案がなされた以上、さけて通るわけにもいきません。

みなさんからの率直な意見を求めたいと思います。来年の総会までには武庫川ユニオンとしての見解を決めておくことが必要になります。たいへん困難な作業ではありますが、みなさんからのご意見を全国の議論にも反映させていきたいと思えます。

外国人の権利を守る唯一の機関は労働組合だ（ルイス・ハマダ）

神戸の集会に一度参加して、今回三重県のユニオンの集会に参加しました。最初大講義があつて、各テーマのディスカッションをしました。私が参加したグループは組合の経営がテーマだった。組合を作るためまた維持するためにはどれくらいの努力と献身が必要か実感しました。

一番重要なポイントは経済問題です。なぜなら労働者の様々な問題に対応するためには小さくても事務所が必要で、そしてより多くの組合員を加入させること。たくさんの献金で組合が成長し、よりよいサービスを提供できるようになるからです。

この集まりに参加して日本のあらゆる地方の組合は外国人労働者の世話をしてくださっていることを知って、非常に喜びました。状況に適してそれらの人たちのことに気を配って問題を解決していくということです。

我々も権利を守るため組合は唯一の機関であることを認める必要がある。組合がなければ会社の意志と気まぐれにさらされる状態になるからです。もつと多くのペルー人が組合に入ることを助けていきたいと思つた。

「たまには温泉に行こう」と（補足・小西）

「たまには温泉にでも行こう。」とハマダとハセガワをさそつた。彼らは毎日仕事に追われ、国内旅行もほとんどしたことがないことを知っていた。問題は会社を休めるかどうかで、休暇は私から要請することにし、参加することになった。

彼らはかなり日本語を理解しているが、分科会は無理かなと思つていた。彼らも全体会が終了すると、部屋へ行こうと思つていたらしい。ところが神奈川のペルー人につかまつた。「私が同時通訳してあげるから、分科会に行こう」とスペイン語でさそつていた。「しまった。つかまつた。」という表情が私には読みとれたが、さそつたのが女性であつたこともあり、彼らは素直に従い、分科会に参加することとなった。

結果は参加してよかつたといつてくれた。私はどうも、組合員に甘すぎる。わがままを許していると、結局これらの成果を奪つてしまうことになるのだと、勉強になった。報告

にもあるとおり、ユニオンの組織の困難さと意義を改めて知ってくれた。組合費も毎月くれるようになるだろうか。オルガナイザーへの脱皮が楽しみだ。

ひょうごの仲間にとつても彼らの参加は大変良かったのではないかと思う、宴会はハセガワのワンマンショーと化した。一月一六日開催の国際交流フェスタの呼びかけには最高の役割を果たしてくれた。
(小西 純一郎)

◇読者からのおたより◇

「南の夢の島」先週十月十日と十二日と沖繩の宮古島にハンセン病闘争Ⅱ国立病院委譲統廃合反対の闘いで行ってきました。沖繩本島からも三〇〇kmもある「南の夢の島」で、本当に美しいサンゴ礁が出来た島です。そんな美しい島で残酷な事が行われた訳ですが、今は回復者の方々が起ち上がっています。国労全国大会お疲れさまでした。宮古・南静園も七〇年の闘いで、人権を回復してきています。少数を恐れず戦い抜くことですね。
(滋賀・I)

入会申し込み書送って 「国労闘争団」ともに「たたかう会」の入会申し込み書、二―三枚送付して。通勤(車) 九十分から百分かけてがんばっています。購読楽しみです。
(岩手・S)

編集部より 「たたかう会」についての資料 お送りします。仲間ふやして、そして地域・職場から運動つくつてよ。「たたかう会」への期待の高まりを感じています。

国労大会に「涙」 国労の大会を傍聴して、またもや機動隊の導入。これが組合の大会かと疑うようなものものしさ。国労綱領を本部が自らふみにじる実態だった。名古屋の代議員は「方針案に反対なら国労から出て行け」と発言していた。こういう人が代議員に選ばれている。私は団結ガンバローをやらず会場を後にした。団結まつりの日、「四党合意はなくなった」と聞いた。(埼玉・H)

編集部より 国労大会には私も涙が出ました。国労運動は私の先生。約三〇年、国労とともに歩んできましたから。大会への会社、国土交通省の見解はさびしいようですね。
(徳島・Y)

送付に感謝 遅くなりました。誌代が切れているのに送付くださり感謝します。
編集部より 誌代切れから二ヶ月送付しています。だって、送金たいへんなものだ。
青年活動家づくり われわれの支部で青年は？ いちばん若い人は？ 年齢が高いですね。社会主義運動は未来を代表している。未来は青年のものだ。後継者をつくることなくして社会主義運動、労働運動の明日もない、青年活動家をどうつくるか、どう働きかけているか、現状について教えてください。
(奈良・I)

編集部より どこも問題意識は同じです。ところが成果はといえば、まだ今いち。でも二十代の若者が論議をリードする勉強会も生まれています。

国労闘争団に支援・連帯 関西の地で国労闘争団といかに連帯するかを討議。①闘う闘争団を財政的に支える、②各府県で名称にこだわらず国労闘争団に連帯する会づくりに全力をあげてとりくむ、③闘う国労闘争団を励まし、支援・連帯する集会等を各府県で企画し、多くの働く仲間に関わりを広める、④今後、労働運動委員会で交流の場をもち、国鉄闘争を軸としてNTTなど反失業、反合理化の交流を深める。の四点を決めました。あとは実行です。
(大阪・S)

編集部より 少し冷えていた国鉄闘争への関心が高まり始めたようです。全国各地でさまざまな支援の組織がつくられています。国鉄闘争の再構築と労働運動再建は一体です。

とめよう！ 自衛隊派兵 アフガニスタンの民衆が米軍の絶え間のない空爆にさらされているなかで、十月二九日、国会では「テロ対策特別措置法」が与党三党の賛成多数で強行採決されました。政府はただちに自衛隊派兵のための基本計画を策定し、十一月中旬にも護衛艦・補給艦などを先行的に送り、さらに本格的な参戦の道へと踏み出しているようです。私たちは米国による「報復戦争」と日本の参戦に反対します。憲法九条を踏みこじって、日本の軍隊が戦後はじめて公然と戦争に参加しようとしているこの歴史的な情勢のなかで、戦争反対！ という私たちの意思をはっきりと示したい。
(生活破壊と戦争への道を許すな！ 京都実行委員会)

編集部より 国際反戦デー集会には小雨の中、二千人をこえる人が集まられたよう。ご奮闘を。

結成総会 朝晩はめつきり寒くなってきました。市内の街路樹も少し色づき始めました。「闘う闘争団」ともに闘う新潟の会」の準備は呼びかけ人を集約中。結成総会は十二月九日の予定。
(新潟・K)

有明はノリの漁期 今有明海は海苔(のり)の漁期に入りました。水門非開放の水質調査を決めた農水省方針にマグマが貯っていると思います。二四日から第四回有明海・不知火海フォーラムの準備

備が進んでいます。今、海況は一応の落ち着きをみせているようですがわかりません。(佐賀・T) 編集部より 十一月二四日からのフォーラムの原稿、寄せていただけ嬉し。

サービス残業 昨年の日刊紙を見て昔を思い出しました。私が執行委員に初めてなった頃(S四八年か四九年頃、昔も役員のみならず職場内でトシの順番でなっていました。もちろん上の方からの順)支部団交で時間外請求の話になりました。当時は請求するにも三〇分、一時間とまとまった時間にならないと請求しない(できない)フンイキがあり、「それはおかしい、一分でも二分でも請求していいはずだ」とガンバって、そういう請求の仕方が一般的になったのです。その後S五〇年代になって、日直中の時間外請求が交渉にのほり、急患が搬送されてくるという電話を受けたときから、そのために待機しているのだから、そこから時間外請求できるということを受用で確認したのです。これは労基法にもかかったことです。昨今はなかなかそういう請求の仕方をする人もいなくなりました。闘いの成果は行使していかないとなくなるんですね。お互いにサービス残業はやめよう。(医療労働者・K)

編集部より 今の職場は昔に帰っているんですね。労働運動はまずはじめの一步からの努力です。増田事件は平和教育つぶし 東京都足立区立第十六中学校社会科教員・増田都子さんは憲法や教育基本法に基づき平和教育を実践してきました。こうした増田さんの教育姿勢に対し産経新聞や右翼都議らは「偏向教師」と一方的にレッテルをはり、執拗な攻撃をくり返しています。その結果、増田さんは二度の不当処分を受けた上に、九九年九月から授業する権利を奪われ、東京都職員研修センターで長期の懲罰研修を強いられています。文部科学省や教育委員会は歴史や社会の真実を教え、平和の尊さを語ろうとする教員を「不適当教員」扱いにして強制的に学校から排除する動きを強めています。増田さんの問題は「その先駆けです」。(平和教育を守る足立の会)

「テロ反対!報復戦争反対!」 清瀬市内で上記の運動を立ち上げました。十月二二日に清瀬市議の布施氏、作家の鎌田慧夫人、同じく作家の佐高信夫人(賛同者)、そして私など市内の市民運動家が集まり発起人になって、「戦争に黙ってられない清瀬市民の会」が運動を始めました。当面は清瀬駅前でチラシをまき、十二月九日(日)午後一時からは清瀬中央公園で集会とデモを予定しています。また二〇〇一年一月末には「音楽と戦争反対の講演会」を予定しています。(東京・H)

常にご連絡を! 今年の「団結まつり」は一〇月二八日に開催されたって? 「通信」では毎回開催予告が掲載されてきたのでそれを待ってたら、今年も予告なし。参加できませんでした。国鉄闘争勝利のためと思いい、毎年参加してたのに。次回をお願いします。(神奈川・H)

編集部より たしかに「団結まつり」のご案内、掲載しないでしまいました。大変なときに…。国鉄闘争勝利はなんとしても果たさなければなりません…。大事な取り組みはお知らせしなければ…。反省しています。これからもご意見よろしく!

「反首切り・リストラ!」国鉄闘争勝利!」集会にご参加を

国鉄闘争への関心がよみがえってきた。NTT十一万人リストラ・合理化、電気通信産業、鉄鋼等でのすさまじい人減らし、さらには特殊法人、郵政の民営化にこのままでは「労働者は死を待つのみ」と国鉄闘争に学び返さねばと、「国鉄闘争への連帯」の意識が自然発生的に芽生えてきたのだ。

国労闘争団と国労闘争団連絡会議(準)は十一月二十五日から二日間、「JRに法的責任あり! 国鉄闘争勝利全国交流会」を開く。ここでは、これからの「国鉄闘争」の戦略方針が議論される。この会議を受け十二月三日(月)午後六時三十分から、東京・千代田公会堂で「反首切り・リストラ! 国鉄闘争勝利!」の集会がおこなわれる。国鉄闘争だけでなく、リストラや首切り合理化攻撃とたたかっている仲間とともに、日本労働運動の未来を開きたいとの集会だ。読者のみなさんの参加を呼びかける。

日時 二〇〇一年十二月三日(月)午後六時三〇分

場所 東京・千代田公会堂
(最寄り駅 JR総武線「水道橋駅」、地下鉄・都営新宿線、東西線「九段下」)

川柳一句

夜が来て 朝が来るよな 気がしない (赤梅)

炭疽菌 タンス預金が 気にかかり (赤梅)